天理教教義翻訳の諸相 ③

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

大正期の教義翻訳

明治30（1897）年、アメリカ人宣教師ピーリー (Rufus Benton Peery) が出版した『日本の要点』(*The Gist of Japan*, New York: Fleming H. Revell Company, 1897.) で天理教が紹介されると、明治43（1910）年、英文通信社の望月小太郎が日英博覧会を記念して出版した『現時の日本』(*Japan To-day; a Souvenir of the Anglo-Japanese Exhibition held in London 1910*, Tokyo: The Liberal News Agency, 1910.) でも紹介された。さらに大正にかけて論文等で天理教が紹介されると、外国人研究者がおぢばを来訪するようになった。彼らは天理教に関する英文書籍を求めたが、船場の『英文天理教』以外に確固たる教義翻訳書は皆無であった。そのような状況で天理教校長の増野道興は英文教義書の必要性を認識し、出版に向けてまず日本語教義書を執筆した後、英訳を奈良女子高等師範学校教授の小泉卓蔵に依頼した。偶然にも出版作業の最中、ローマで開催される宗教博覧会に出展するよう文部省から天理教に依頼があり、この英文教義書の出版を急ぎ、実写フィルム3巻とともに出展することになった（中西，1924:8）。こうして出版されたものが増野道興原著『英文天理教』(*TENRIKYO*, Tambaichi: Doyusha, Tenrikyo Head Church, 1924.) である。これは教会本部から出版された初の教義翻訳書となった。その巻末には英訳「みかぐらうた」が収録されている。これは当時、英国赴任中の岩井尊人（たかひと）が英訳したものである。明治期以降、外国人研究者らが「みかぐらうた」の翻訳を試みたが、教内関係者による英訳としてはこれが初出である。ちなみに前年の大正12（1923）年、上海の中華教会（日本橋、原澤進会長）から『御神楽歌：天理教漢訳』（大和正夫訳）が出版されており、教内の外国語訳「みかぐらうた」としてはこちらが初出となる。

岩井尊人は増野道興、小野靖彦、広池千九郎らとともに大正期に活躍した論客の一人で、東京帝国大学在学中の大正3（1914）年から『道の友』に連載をはじめ、その論考は昭和13（1938）年まで103篇にわたっている。彼は幼少期から中山家に出入りしていたようで、中山正善2代真柱の大阪高等学校進学も岩井の進言から実現したという（岩井，1938:41）。大学卒業後は三井物産に勤め、大正15（1926）年までロンドンに赴任した。昭和11（1936）年には、二・二六事件ののち組閣された廣田内閣の文部大臣、平生釟三郎の秘書官を務めた。その頃、急速に台頭した陸軍が政治介入を強め、その圧力をうける文部省と本教との間で思想統制をめぐって緊迫した交渉が続いていた。2代真柱は対応を協議する過程で岩井に助言を求められることもあった（東井，1997:163-168）。いわゆる「革新」という教団の運命を左右する一大局面において、岩井は助言だけでなく『論達第八号』草案に加筆訂正するなど深く関わった（東井，1997:172-174）。

教学との接点をみると、岩井はまず大正4（1915）年に『天理教祖の哲学―みかぐらうた新研究』を出版している。その中で岩井は数え歌としての「みかぐらうた」の特性に着目し、「民衆の間に普及融和するには之の形が最も好都合である。記憶されやすく、反復吟誦は反射的であるから記憶を想ひ起すの精神抵抗がないなど、みな科学的に実証されるのである。惟ふに言語の極致は詩歌である。（中略）教祖が数へ歌の形を採られたのは之の内発的の必然性によつてゐると思ふ」（岩井，1915:22）と述べている。また昭和3（1928）年に出版した『泥海古記　附注釈』では、神道の在来神と同名の神名との相違を明確にし、天理教教義の独自性を強調しつつ、泥海古記の象徴的理解の重要性を説いている。『こふきの研究』によると、岩井は「泥海古記は支離滅裂だから問題を起こすのだ。今のうちに整文しておかねばいつまでもその禍根が断たれない」として同書を出版したという（中山，1957:4）。いずれも本教教義を学際的知見から捉え、教外者の誤解や偏見を克服しようとした氏の先駆的な姿勢の証左である。そのような岩井の教義理解に関し、金子圭助は「尊人の本業は何んと言っても実業家であったであろうが、「道の友」に繁く寄稿し、そのことに依って天理教教義を深く理解した。深く理解しただけに終らせず教義を真正面から論述し、その時その時の趨勢を鋭くキャッチし、信者の陥りがちな陥穽に警鐘を鳴らしたり、啓発したりしつつ、氏の立場から本教の方向をリードした。尊人ほど世界的視野をもち幅の広い、かつ透徹した知識による分析は誰にもまねのできることではない。」（金子 1990：236）と評価している。

さて、岩井の「みかぐらうた」英訳を見ると、第1節では、

「あしきをはろうてたすけたまえてんりおうのみこと」(Evil being swept away, Save us, Parent, Tenri-o-no-mikoto.)

とあり、「てんりおうのみこと」の神名の表現に God を使わず、注釈で The name of the Supreme Being としている。第2節以降にも God は用いられていない。さらに神名の前に Parent を用いて親神の訳出に苦心している。岩井は可能な限り西洋的神概念からの切り離しに配慮したようだ。また第2節の英訳では、

「ぢとてんとをかたどりてふうふをこしらえきたるでな」(Taking as pattern the Earth and Heaven of this Universe, I create Wife and Husband.)

とあり、現行訳では「ぢとてん」Heaven and Earth、「ふうふ」Husband and Wife となる個所を、岩井は極力原文の語順と手振りに対応するような語順で訳した。上述の第1節も「あしき」Evil から始まっているように、つとめの地歌としての性質を考慮しつつ、極力それに適うよう配慮していたようだ。当初から地歌として機能する英訳を模索していたようにみうけられる。さらに岩井は昭和7（1932）年に『英訳天理教綱要』(*The Outline of Tenrikyo*, Nara: Tenrikyo Doyu-sha, 1932.) を出版し、その中で一部改訳した「みかぐらうた」英訳を紹介している。昭和8（1933）年9月10日号の『天理時報』によると、その岩井の英訳「みかぐらうた」は、明本京静によって吹き込まれてレコードとなり、世界宗教大会出席のため渡米していた中山正善2代真柱の手許に送付された。開催地のシカゴでは、岩井の『英訳天理教綱要』と英訳「みかぐらうた」レコードが紹介され、天理教教義の顕揚に大きく貢献した。英訳「みかぐらうた」が地歌として吹き込まれ、そのレコードが海外で紹介された事実は、教義翻訳史上、画期的な出来事である。「みかぐらうた」に対する岩井の慧眼と、氏の英訳という功績なしにはその偉業は成し得なかった。教学史のみならず、教義翻訳史においても岩井尊人はまさに先駆的な存在であったといえよう。

［引用文献］
岩井尊人『天理教祖の哲学―みかぐら歌新研究』一成社、1915年。
岩井尊人「御母堂様を偲びまつる」『道の友』、1938年9月号、pp. 40-42。
金子圭助「岩井尊人の天理教学研究―天理教教理史研究の一齣」『ビブリア』、1990年11月第95号、pp. 232-249。
東井三代次『あの日あの時おぢばと私（上巻）』養徳社、1997年。
中西喜代造「“TENRIKYO”出版の前後」『道の友』、1924年10月号、pp. 53-61。
中山正善『こふきの研究』天理教道友社、1957年。